

黒川文庫蔵『清水浜臣本 うつほ物語』解題

野口元大

さきごろ本学図書館の黒川文庫に新しい書物が加わった。清水浜臣が自らの考察・研究を詳細に書き入れた『うつほ物語』の写本一部二〇冊、縦二八・〇センチ横一九・七センチの袋綴じ本である。表紙は淡黄色の厚手紙に花菱つなぎの文様を空押しし、料紙は薄葉の斐紙でていねいに書写されている。書写年代はほぼ浜臣の時代と思われるが、料紙や筆跡から見ると、古写本を敷き写しにしたものかと推測できる。現在は、表紙の上から白紙を覆い、十冊ずつ二帙に収めて大切に保護されている。

表紙左肩に巻名が直書きされており、その下部に巻序が記されているが、その数字は明らかに後のものである（青インクか）。白紙の包み紙にもほぼそのまま記されて整理の便宜を図っている。いまそれにしたがって表紙の巻名を掲げる。

としかけ（その右脇に「空穂物語」

濱臣本」、右下隅に「共貳拾」と朱書、

右肩に「物語」と記した朱丸印、これは以下各冊にも捺されている）

藤原の君

たゝこそ

梅の花笠 一名春日詣

さかのゐん 蔵ひらき下巻 (元の巻名を擦り消して別筆で記入。内容は「嵯峨院」)

さかの院 吹上ノ上 (内容は「国譲下」)

ふきあけ上 (「上」をミセケチにして別筆で「中」とする。内容は「吹上上」)

ふきあけ下

祭のつかひ

菊の宴 (以上上帙)

あてみや

はつ秋 おきつ白波 (「おきつ白波」は本来「たつのむら鳥」の別名)

たつのむら鳥

蔵ひらき上巻

蔵ひらき中巻

たかとのゝ上 (内容は「楼の上」下巻)

たかとのゝ上 下終 (内容は「楼の上」上巻)

国ゆつり上 (内容は「国譲中」)

国ゆつり中 (内容は「国譲上」)

国ゆつり下 (内容は「蔵ひらき下」)

本書には各冊の冒頭、墨付き第一丁表の中央上部に「清水濱／臣蔵書」という大きな朱の方印が捺され、巻末には「泊舎蔵」の子持ち枠の隅切長方朱印があつて、これが浜臣の手沢本であつたことを明示する。また多くの書き入れは筆跡から浜臣自身の手になるものであり、時を違えて数回にわたるものであることが認められる。

また巻頭右下部には各巻とも「黒川真頼蔵書」「黒川真道蔵書」、また第二巻以下には「黒川真前蔵書」の長方朱印もあり、この本が黒川家代々に伝えられたものであることが確認される。真頼の養父春村は浜臣と親しい交友関係にあつたので、本書が黒川家に伝わつたのは自然のことだつたと思われる。

『うつほ物語』の本格的な注釈書の最初のものであるのが、浜臣の『空穂物語考証』であるが、本書はその準備段階の足跡を示すものと思われる。

当時一般に流布していた版本のテキストは、巻名を誤り、巻序は混乱し、本文には錯簡や重複衍文を抱え込み、細かな誤謬は数え切れないほど、はなはだ乱れたものだった。研究の第一歩は、そこで各巻の巻名と内容とが一致しているかどうか、そして巻の順序はどうあるべきか、といった最も低次元のところから出発しなければならなかった。右に掲げた本書の表紙に記された僅かな文字にもそうした試行錯誤が読み取れる。

さらに内容の理解に進もうとすると、文意が通じない箇所が続出し、その読解の苦心の跡が、本書には至るところに、書き入れという形で残っている。行間にも上欄にも細かい字で、また墨ばかりでなく、朱や青で傍線が引かれたり、傍点・圈点が施されたりしている。幾度となく研究が重ねられたらしい。

それらを観察すると、まず古活字本（としかげ）だけは刊行されていた・製版本やイ本、和歌の場合には『風葉集』を参

照し、さらには出たばかりの細井貞雄の『宇津保物語玉松』の校異を取り入れて本文を訂し、文意を把握しようとする努力があり、ことに登場人物と互いの関係を明確にしようとしたことが、行間の傍注に見ることができる。また難語句や典拠・出典など考証や注釈を必要とする語句を摘出し、簡単な漢字注をはじめ、上欄にはしばしば「濱按……」として典拠を挙げての考証が試みられている。そして時には、「山岡本云……」「春海云……」「保孝云……」「或人云……此説非也」など先輩の考証を引用したり、批判したりする作業が行われていたことが読み取れる。

そうした中で、ことに大きな努力を傾けたのは、各所に見られる錯簡の処理である。まず「藤原の君」では、

たいめんしたりつるとな聞え給そかし△平中納言殿より
とある箇所に頭注を付し、

△こゝに脱文あり異本にて補べし卷末に別記せり

と、異本によって底本の脱落を補っている。またいわゆる「桂の巻」についても重複した本文の指摘と、あるべき位置の指定に成功している。

次いで、「はつ秋」では、冒頭に頭注して、

此巻いとみだりたりと見ゆ／十六丁七月朔日といふを此巻の／はしめとしてさて十七丁よみて／ことしはわけのよ
ねいとおそき／年也といふとあるよりこゝにかへ／りてよむべし

とする。そして、十六丁の当該箇所には、

七月朔日頃云々 これよりを此巻／のはしめとすへし以下十七丁／かそへてことしはわけのよねいと／おそきとし
なりといふつゝき／より初丁かゝるほとに左大臣殿／のといふへかへりてよむへし

こゝに七月ついたちころと有／同日にて下文には七月十日はか／りとあり

と注している。この処置によってこの巻は筋道の立つ読み方ができるようになったわけで、今日から見てもほぼ成功した復原案だったとしてよい。

次の課題は「国譲中」（本書では上巻とする）における大きな錯簡の復原である。この巻では上欄の注記のほとんどが錯簡の復原に関するものになっているが、あまりに問題を複雑に考え過ぎてかえって混乱に陥っている嫌いがあり、『空穂物語考証』にも「他日可考」と記しているように挫折したらしい。そのせいか以下の巻々には、「国ゆつり下」（実は「蔵開下」）の初め十三丁までの部分を除くとほとんど注記が見られない。『空穂物語考証』も相当部分は空白である。

それにしても、こうした緻密な研究が知られるようになるにつれ、この浜臣のテキストは、研究者仲間の標準的な地位を占めるようになったらしい。現在各所に残されている写本の中に、『清水浜臣本系統』と呼ばれる一群が形成されているが、それらの本に共通の特徴として、中世を通り抜けてきた写本では大きく変化してしまっているのが通例の歴史的仮名遣いが、ほぼ正しく保たれていることがかねて注目されてきた。改めて本書をよく見ると、問題の仮名遣いの箇所は、もとの字がていねいに擦り消され、その上から正しい仮名遣いに改められている。浜臣の手で修正されたことが明らかで、年来の疑問が晴れるとともに、本書がそれらの写本群の原型の位置にあることが確認できる。

『うつほ物語』は、現在ではほとんどの活字本の底本として前田本が用いられ、一部に浜田本が採択されている。またそのほかに、幾つかの由緒正しい伝本が知られ、研究者にも利用されている。しかし、この物語の研究が本格的に始まったころ、江戸時代も後半に入ったころは、これらの本は公家や大名家の秘庫に深く蔵されていて、市井の学者のたやすく見られるものではなかった。

そのため当時の学者たちは善本を求めてさまざまに苦心したのであるが、ようやくして求め得て彼らの間で「古本」

と呼んで珍重されたテキストがある。江戸時代の研究は多かれ少なかれこのテキストに依拠していると言ってよい。ただし現在ではその「古本」そのものは失われ、当時作成されたいくつかの校本や注釈書などによって間接にうかがい知るはかばかであった。この浜臣本が古写本（といっても筆跡から判断するときは古いものではないらしいが）を敷き写しにしたものであるとすれば、浜臣の学識や交友関係から見て、この書本が「古本」そのものか、少なくともそれに非常に近いと判断されたものであつたらう。そうとすれば、江戸時代から明治にかけての研究の基礎となったテキストを、われわれはこの本によって知ることができるわけで、研究史の観点からすれば、極めて貴重な資料である。

戦後の混乱の中で黒川家の蔵書群から離れた本書がここ黒川文庫に再び戻れたことはまことにめでたくうれしいことである。岡山のノートルダム清心女子大学所蔵の黒川文庫にも、『うつほ物語』の校訂本があり、当時の国学者たちの業績をうかがい知ることができるが、本書の出現によって、この物語の研究史に新しい貢献が加わることだろう。